

ふり向けば青い海

私の航跡ノート——桐島洋子



ふり向けば青い海

私の航跡ノート

桐島洋子

〈著者紹介〉

桐島洋子（きりしま・ようこ）昭和12年東京生まれ。都立駒場高校卒業。文藝春秋・編集部に勤務の後、フリーのライターとして世界各地に取材旅行。昭和47年に発表した「淋しいアメリカ人」で第3回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。主な著書に『淋しいアメリカ人』『風の置手紙』『女がはばたくとき』『女ざかりの美学』『聡明な女は料理がうまい』『生きることを熱烈に愛する40のおはなし』『マザーグースと三匹の子豚たち』



JAKOMETEI

ふり向けば青い海——私の航跡ノート

著者・桐島洋子

編集者・青木太郎

発行者・槌谷英一郎

発行所・株式会社じゃこめてい出版

東京都千代田区神田神保町二丁目四六番地

電話 東京（二六四）三七七九

振替・東京二一六七一七九

印刷・三晃印刷株式会社

製本・協和製本株式会社

© Yoko Kirishima

0000-17035-3354

ふり向けば青い海——私の航跡ノート・目次

第I章

娘から女へ女から母へ

クオ・ヴァ・デイス

ひとまず就職して

憧れの文藝春秋に入社

よく働き、よく遊び

念願の編集部に

自分だけの城をもつ

実現した“理想の生活”

享楽のアジトの崩壊

死と背中合わせの生

新しい生命の宿り

秘密の出産計画

母親となった日

8

15

21

27

33

39

45

51

57

63

69

75

自立への船出

81

第Ⅱ章

親と子のタイム・トンネル

おんな四代の旅

88

滝の宿

107

ヨーロッパ敬老旅行

124

蒸気機関車に乗って

146

第Ⅲ章

時にはさざ波のように

海の中にもうひとつの宇宙がある

162

蒼空に溶けていくとき

169

光溢れる迷宮の島

174

みずみずしい緑と清らかな碧

179

この海辺に魂を残していく

184

あかねさす紫野行き標野行き

191

やはり私は旅が好きだ

202

わが娘桐島洋子へ

桐島龍太郎

206

あとがき

220

ふり向けば青い海――私の航跡ノート

カバー写真

興嶺敏彦

鈴木義明

装幀

吉村 忠

第I章

娘から女へ女から母へ

クオ・ヴァデイス

高校時代、私は仲良しの八人で作ったグループをQ.U.Oと名付けた。そのころ見た映画「クオ・ヴァデイス」のクオで、「何処へ」という意味である。みんなまだ将来への志向が混沌として、何処へ行こうとしているのか自分自身でもわからない状態だったのだ。

私は小学生のころからジャーナリストにあこがれ、わが家でずっと愛読していた『文藝春秋』の姉妹誌『子供春秋』を仮想創刊し、編集長になったつもりでチマチマと目次作りを熱中していた。このジャーナリスト志望は高校生になっても持続していたが、出版社や新聞社にはいる前に、まず卒業しなければならぬであろう大学への進学意欲は、衰退の一途をたどっていた。

もともと私は、学校の勉強というものがどうしても性に合わない。一定の時間集団的に教室にとじこめられ、いっせいに前を向き、あてがわれた段取りに従って学ぶという方式が退屈で苦痛でたまらないのだ。仕方なく受講してはいても、すべて右から左へ抜けてし

まう。自分で本を読んだ方がよっぽどよく頭にはいるのに、なんでわざわざこんな非効率なことをしなければならぬのかと、アホらしくてならず、いつもサボレルだけサボっては、Q.U.Oの仲間と外で遊んでいた。

私は学校や勉強が嫌いだったわけではなく、どちらかむしろ積極的に好きだった。ただ私にとって勉強とはしたいときに自分でするものであり、学校は友達とつきあうためのサロンとして大切な存在だったのである。

二年のとき生徒会委員長に選ばれた私は、ホワイト・ハウスに乗り込んだジャクリーヌ・ケネディのように、さっそく生徒会室の壁を明るい色に塗りかえ、前衛絵画を飾り、すっかり私の好みに改装してしまった。雰囲気が一変した生徒会室に学校当局は眼をむいたが、居心地のよい溜り場を獲得した私と仲間たちはいよいよ教室離れして悠々自適の毎日を過ごすようになった。

委員長の任期を了えてからも、私は教室に戻らず、隣接する東大教養学部にはいりこんで、学生運動に熱中しはじめた。当時全盛のうたごえ運動の指導的グループだった東大音楽合唱研究会に加わって、その読書会委員長に選ばれ、おおいに気負って活躍するかたわら、演劇研究会にも首を突っ込んで駒場祭の芝居に出演したりしていたのだから、とても大学の受験勉強どころではない。

それでもせっかく毎日東大に入り浸って暮らしているのだから、大学の勉強の方も経験してみようと思い、幾度か講義を聴いてみたが、いっこうにおもしろくない。わざわざつかいな入試を経験して正式な学生になりたいとは思わなかった。

私の一番の親友だった野中ユリ（現在最も評価されている版画家のひとり）は、政治づいた私とは対照的に芸術至上主義で、その頃からもう銅版画に打ち込みはじめていた。高校入試の成績が東京で一番だったという秀才の彼女まで、私と相次いで進学コースを脱落したので、周囲はあぜんとし、QUOグループは、朱に交ればあかくなる”の見本として勉強家たちに敬遠された。

いっぽういわゆる就職組とははじめからまったく異質の人種で、いまさら仲間入りのしようがない。就職組とはいっても、彼女たちに職業的抱負などあるわけがなく、結婚までのつなぎに一応おつとめをしておきましようという、いわば花嫁修業組である。

「その、結婚を目的にするということが、私にはどうもわからないのよ」と、私は就職組に議論をふっかつたことがある。

「私もいつかはすごく好きで一緒に暮らしたいという人とめぐりあって結婚したいと思うけど、それと職業とは別問題でしょ。男の人だって皆いずれ結婚するつもりでも、結婚が職業かなんて二者択一は考えないじゃない」



執行委員長に当選したときの学校新聞

「だって女には家事という役めがあるんだから、結婚したら家庭に入るのが本当だと思うわ」

「なんで家事が女の役めなの？」

「なんだって、それが常識でしょう」

「そうかしら、私にはそんな常識はないな。私は家族の一員として家事を分担するのが常識だと思うから、毎日料理も掃除も洗濯もやってるけど、女だからやるんだとは思ってないわよ」

「へえ、あなたがお料理なんかするの？」

と相手はびっくりした顔をする。

「あなたはしないの？」

「だってお母さんがいるもの」

ここで私は無然としてしまう。

彼女たちは専業主婦の母親にかしづかれてあげ膳すえ膳のご身分なのだ。私にも母はいるが、戦後の没落に加えて父が病に倒れたわが家では、母が旅行社に勤めて必死に家計を支えていた。

親は働きながら子供は勉強しながら、その合間に手分けして家事をかたづけるというのが、私にとっての家庭であった。

花嫁修業組の連中がよく使う「家庭にはいる」という言葉は私には奇異な響きがする。結婚するまでもなく誰でも家庭に属しているのだから、当然そこには家事があるのに、彼女たちにとって家事とは、結婚してはじめて発生するものらしい。私には子供の時から日常の習慣にすぎないことが、彼女たちにはわざわざ花嫁修業なるものを行なって身構えるほど大変な仕事なのである。

彼女たちとはちがう常識を育ててくれたきびしい家庭環境に、私は感謝しなければならぬだろう。貧しいのはわが家だけではなかったが、同じ苦勞をしても、それが意識の變革につながらない母親が多いらしい。娘にはこんな苦勞をさせたくないと思うところまでは同じだが、その先は「夫まかせの人生にならないように学問や技術をばっちり身につけて自立できる女になって」と、「もっと頼もしい夫をつかまえて一生ラクができるように、なにをおいても花嫁修業を」との二派にわかれ、どうやら後者の方が圧倒的に多いらしい。

しかし母は徹底的に前者であった。わが家では、男だから女だからという差別はまったくなく、兄たちも同じように家事を分担させられていた。

また、子供たちを全部大学へやるだけの経済力がないばあい、男の子を優先的に進学させるのが大方の常識らしいが、私の母は、兄たちに「勉強が好きでもないのに、無理して大学へ行くことはないでしょう。高校だけで就職したら」といい、私には「洋子は大学へ行ってもっと能力を伸ばすべきよ」と進学をすすめるのだった。それでも兄たちはアルバイトをしながら大学へ行き、私は就職し、結果的には世間並みになってしまった。

ともかくこういう環境で育った私だから、まわりの就職組とは、まるで感覚がちがう。それにクラス分けでは進学のクラスにはいつているので、就職指導の先生とも全然縁がない。大体ジャーナリストになりたいなどといっても相手にしてはくれないだろうから、相談に行く気もしなかった。

こうして進学組からも就職組からも自己疎外した私は、卒業が近づくにつれ、さすがに時々不安な孤独感に襲われるようになった。このまま大学には行かず、就職もできないとなったらいったいどこでどうして過ごすのか。まさか学生運動だけ続けているというわけにもいかないだろう。クオ、クオ、クオ、クオ・ヴァディス：グループの名前は不安なときの私の呪文になった。

しかしそんな不安に長時間沈みこむにはあまりに忙しかった。高校三年の私は、学生運動に加えて、その仲間のひとりとの恋愛にも夢中になっていたのである。